
伝説の召喚獣！

犬吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の召喚獣！

【Nコード】

N8923T

【作者名】

犬吉

【あらすじ】

【偉大なるもの 魔竜を地の底へと落とし 世界に光を取り戻せり】

800年前の伝説が残る、剣と魔法の世界【パラスティア】。そこに住まう召喚士の少女 クレア・トアデユヒター と、彼女に召喚された高校生 諏訪 零司。二人が出会う時、800年前の伝説がその続きを刻み始める。

諏訪零司の場合

平凡な日常。

誰もが当たり前前に享受し、しかしどこかでそれを拒絶する。

誰もが心の何処かで、それが終わることを望んでいる。この退屈な灰色の時間の終わりを告げる、ドキドキする様なスペクタクルを。

それはこの男子高校生

諏訪^{すわ} 零司^{れいじ}も同じであった。

だが殆どの人間は、万が一にでもそんな事態に巻き込まれたなら、確実にこう言うだろう。

「冗談じゃない、平和な日常を返してくれ」と。

彼らが望むのは主役ではない。大スクリーンで映画でも観るかのように、安全なところからそれを見る傍観者。

「冗談じゃねえ……！ 何なんだよ、これはあつ！？」

目の前に広がる光景に零司は叫ぶ。それが何の解決にならないと分かっている、それ以外に出来る事が何一つ無かったのだ。

砂埃が風に舞い、狂乱が零司を包みこむ。足元にはジュースと菓子が入ったコンビニ袋が落ちていて、零司の後ろには膝を付いて息を荒げる少女。そして零司の正面には三つの、まるで巨人のような

否、実際にそれは巨人であった。

一つは筋骨隆々という言葉が生易しく思える程に、とんでもない体軀をした一つ目の巨人^{サイクロプス}。

一つは、巨大な岩を粗雑に削り出したかのような姿をした寸胴な巨人^{レム}。パラパラと欠片が落ちていく様に恐怖を感じてしまう。

最後の一つはゴーレムと同じ姿ながら、しかしその体が金属で出来ていた。

三体の巨人の瞳は零司を捉え、今にも動き出さんとしている。零司は思わず息を呑んだ。その身を支配する恐怖の前に、周囲から響く狂気のような熱気の叫びも耳には届かない。

平和で退屈な日常は、無くしてからその価値が分かる。逆に言えば、無くさなければその価値に気付く事はないのかも知れない。

何故、どうしてこうなったのか。零司はひたすらに誰かに問い続けた。

運命の日は木曜日。何時ものように寝坊寸前で跳ね起きて、学ランに袖を通すや、マウンテンバイクで全力疾走。

滑りこむようにして駐輪場にイン。昇降口に飛び込んで、一気に階段を駆け上がる。

教室に駆け込んだ瞬間、担任の出席簿の一撃。ズキズキと痛む頭をさすりながら、午前の授業を消化。昼休みは学食で、デラックス天ぷらうどん大盛りを食いながら、弁当を掻つ込む。

午後の授業は睡魔と闘いつつ、結局は敗戦。気が付けば放課後、ヨダレの海と化した自分の机に驚愕。慌てて拭きとって、顔を洗いにトイレへ。

そうして、駐輪場に着いたところで気が付く。自転車のカギが無

いのだ。

幸いにして自宅に帰れば予備の鍵はあるが、しかしこれでは帰りはバスだ。本来使われる筈のないバス代は、財布に地味に痛い。

「はぁ……ツイてねえなあ……」

などと溜め息を吐きつつ、テクテクと歩く。夕暮れの街は帰宅する人の流れで、歩き難い程度に混雑していた。

途中のコンビニで炭酸飲料とポテトチップスを買い、再び帰宅を再開。大通りの信号待ちの最中に、今の時間を携帯を開いて確認する。

「この時間だと、次は……38分か？」

うる覚えのバスの時刻を思い出しながら、独り言ちる。信号が青になったので、零司も携帯をしまつて周囲に合わせて歩み出した。

……こ……者……わ……えを聞……え

「っ……!？」

突然、脳内に声が響いた。そうとしか表現できない現象だった。

キヨロキヨロと辺りを見回すが、誰も零司を見ていない。

何故なら、零司以外の人間、車、鳥、向こうを走る野良猫に至るまで全てが静止していたのだ。白黒に変わった世界で。

「な……何だよ、これは……っ?」

零司はふと、自分の足元が光っている事に気が付いた。

淡く光る二重真円。その間には、見た事の無い文字が羅列してい

る。そして円の内側には、菱形を十字になるように置いたみたいな物が描かれていた。

この…えを聞く者よ、我が……を聞き……けに……えたまえ

更に脳内に声が響く。先程よりもハッキリと聞こえるそれは、少女のものようであった。

「クソッ、一体誰だよ!? これも、全部お前がやってんのか!? 意味分かんねえよ! もっとハッキリ喋りやがれ!」

理解出来ない現象に苛立て、ついに怒鳴り散らす。怖いと思う気持ちよりも、理不尽なこの状況に対する怒りの方が上回ったのだ。その瞬間、異変が更に起こった。足元の魔方陣 少なくともそう表現するのが妥当であろう が、強く輝きを放ったのだ。

「なっ……!?!」

目も眩む輝きに、零司は目を閉じる。瞼の向こうからでも分かるほどの輝きに、それでは足りないかと手で顔を覆い隠した。

「うわっ!?!」

直後、全身を襲う浮遊感。ガクン、と落ちる感覚。あれ程に眩しかったものが消え失せ、全身に突風がぶち当たるのが分かる。

零司が目を開くと、そこは 何処なのだろうか、真っ暗な場所を、ひたすらに落ち続けていた。

時折、真っ暗な中に光の粒のような物が通り過ぎていくのが見える。

「な……ななななな~~~~~~~~っ!?!」

驚きと悲鳴と困惑とが混じり合った奇妙な声を上げて、零司はその空間を落ちて行く。

どれほど落ちていただろうか。何かが此方に向かって上がってき
てるのに気が付いた。

「何だあれ……？」

豪く遠い筈なのに、その姿がはつきりと見える。物凄い速さで落
ちている筈なのに、とてもゆっくり距離が縮んでいる。

緑と白を基調とした、どこかの民族衣装であろう服装。所々に金
の装飾が施されてある。

「ええっ!？」

ついに交差して通り過ぎる瞬間、零司は驚きに目を見開く。

その装束を纏った誰かは零司と同じ年頃の男性であった。黒髪の
短髪、目は多少ながらツリ目気味で、精悍な顔つきとは言えない、
幼さの残る顔立ち。

その顔を、零司はとても良く知っていた。生まれてからずっと、
一日としてそれを見ない日など無かったからだ。

「……俺？」

思わず呟くと、向こうは何か可笑しそうに笑った。そしてそのま
ま、入れ替わるように上へと行ってしまった。

待ってくれ。そう言おうとするよりも早く、真っ暗な世界が終り
を迎える。

「またっ……!？ うわあああああっ!!」

この空間に來た時のように白い光が弾けて、世界を塗り替えた。

光が収まった瞬間、世界は一変していた。

どこまでも広がる地平線。連なる山々。広大な森と、そこを切り開いて作られたのであろう、巨大な街。街の奥にはまるでヨーロッパかファンタジー世界にあるような城。

何故そんな事が分かるのかといえば。

「うわうわうわあああああああああああつ！？！？」

零司の体が空中　　街どころか、周囲を見回せる程の高さに投げ出されていたからだ。

こんな高さからパラシュートも無しで落ちたなら、間違いなくミンチになるだろう。

だがしかし、奇妙な事が起こった。恐怖に顔を歪めながらも、しかし意識だけは無くさないでいる零司の体が、徐々に何かに引っ張られていくのだ。

「……！？」

これ以上何があるのかと、零司は恐らく引っ張られる先であろう場所に目を向けた。

そこにあつたのは、歴史の教科書で見たことのある　コロセウムに良く似た場所だった。

そこを認識した途端、零司を引く力が強まった。視界が歪み、まるで拡大鏡でも覗き込んだかのように、視界がグニヤリと歪んでいく。

「　　ッ！？！？」

地面が、あつという間に近づく。悲鳴さえ上げられずに、零司は地面へと叩きつけられたのだった。

「……うう……ゴホゴホッ！」

いきなり埃っぽい空気を吸い込んでしまい、咳き込む。と、そこで零司は自分の体を慌てて確認した。

あれだけの高さから落ちたにも関わらず、その体には怪我一つなく、土煙で学ランが汚れた程度であった。

取り敢えずミンチになっっていない事に安堵し、零司はズボンの汚れを叩いた。

一体、ここは何処なのだろうか。豪く賑やか　というよりやかましい　場所のようだが、先程の　コロセウム　だろうか。

「あ……あなた、誰？」

「え？」

背後から掛かった声に、間の抜けた声と共に振り返る。そこにいたのは、真紅の宝石の付いたペンダントらしき物を握りしめた少女。

背中まであるハニーブロンドの髪と、エメラルドの瞳が印象的な零司と同じ年頃であろう美少女。

銀色のガントレットや、チェストアーマーは欠けて、汚れて、ひび割れているし、晒された素肌には擦り傷や切り傷が、数え切れない程にあるのが分かった。

何でこの子はこんな格好をしているのか？　何でこんなに怪我をしているのか？　そもそも、ここは何処なのか？　などと考えていると、不意に地面が揺れ、背筋が寒くなった。

まるで巨大怪獣でも歩いているかのような　実際に、そんなのを体験した訳ではないが。

零司は恐る恐る振り返る。振り返りたくないという思いを押し伏せて、勇気を出して振り返った。危険に対して曖昧な認識のまま行動すれば必ず失敗する。だから、何がどう危険なのかをしっかりと認識することが大事なのだ。

「冗談じゃねえ……！　何なんだよ、これはあつ！？」

そして零司は、振り返った事を激しく後悔した。そこにあつたのはとても常識では考えられないような状況　壁のような三体の巨人が、自分を見ている光景だった。

「くっ……こうなったら仕方ないわ」

少女は立ち上がり、零司にその細い指先をビシィ、と突き付けて言った。

「クレア・トアデユヒターの名において命ずる。あれと戦い、殲滅しなさい!!」

「出来るかあっ!!」

理不尽過ぎる言葉に、零司は思わず叫んでいた。

クレア・トアデユヒターの都合

薄暗いコロシアムの控え室で、クレア・トアデユヒターは静かに瞳を閉じていた。

これから向かう所は死地。それは彼女の命ではなく、彼女の人生そのものを賭けた戦場。

クレアはかつての名門、トアデユヒター家の長女である。

800年前の魔竜大戦においては、この世界【パラスティア】に勝利をもたらしたという、賢者ユリウスを祖にする、召喚士の家柄。

落ちぶれたとはいえ、その誇りはトアデユヒターを支え、今に至るまで、その血を伝え続けた。

「兄様……！」

没落した原因は、偏に召喚士、魔道士の才に恵まれた者が生まれなかった事にある。

だがしかし、800年の時を経た今代において、ついに才ある者が誕生した。

フレデリック・トアデユヒター。魔法学院に通わず、独学で魔法を学び、しかしその実力は学院に通う誰よりも上回っていた。

魔道の天才。ユリウスの再来。

誰もがその名を称え、宮廷魔道士への道さえ夢物語ではなかった。

「必ず……あの男を！」

クレアは兄を慕っていた。自慢の兄で、誰よりも輝き、進み行くその背中。彼はクレアにとって自慢の人だった。

だが、その栄光の道は暴虐によって絶たれようとしていた。

トアデュヒターの屋敷は、街より少しばかり離れた場所にあり、その日、フレデリックは調べ物をする為に大図書館へと向かった。調べ物が終わった頃には外はすっかりと暗くなり、嵐が近いのだろうが、風が荒々しく吹き始めていた。フレデリックは急ぎ帰宅の途に付く。

だが、彼が自らの足で屋敷に帰ることはなかった。

闇討ち。

彼の才能を妬み、自らの地位を危ぶんだ卑劣なる者の企みが彼を襲ったのだ。

幸いにして一命こそ取り留めたが、未だ予断を許さない状況。

クレアは心の底より卑劣なる者に対して怒り、激しく憎悪した。

ヴィグル・バルガット。

クレアと同じく召喚士の家系であり、巨人を従える一族。

ヴィグルはバルガット家の長男であり、才あるものの、その性格は陰湿にして卑劣。フレデリックとは幾度と無く激突した人物だ。

何故犯人がヴィグルであると分かったのかといえば、フレデリックの手の中に、彼の服から引きちぎられた家紋入りのブローチがあ

ったからだ。

クレアはすぐさま、ヴィグルを闇討ちの犯人として訴えた。だが、相手はバルガット。国内で有数の権力を持つ相手であり、没落したトアデユヒターの訴えをその権力をもって握り潰そうとした。

だからこそ、クレアはヴィグルに対して決闘を申し込んだ。

勝利者には栄誉と褒美を。敗者には敗者に相応しき処遇を。しかし、故意に命を奪ってはならない。それがこの国の決闘のルール。

「っ……」

狂乱のステージに、クレアはその足跡を刻む。薄暗い室内にいたせいで少しばかり太陽が眩しい。

「ククッ……トアデユヒターの小娘、よくも逃げずに出てこれたもんだなあ？」

「ヴィグル……兄様に恐れを成して闇討ちした卑怯者！ その口をすぐに黙らせてくれる……！」

「ハッハッハッ！ 証拠もなくそんな事を言われるとはなあ！ 面白いなあ……本当に……」

いやらしい視線で、クレアを舐め回すようにヴィグルは見る。

クレアがこの決闘に敗れた際、彼女はその身をヴィグルに捧げる事を、クレアが勝利すれば、ヴィグルは闇討ちの罪を認め裁きを受ける事を確約していた。

それを書いた書面は封印されて、立会人である王家に預けられている。

「兄様……そして偉大なる我が祖先、賢者ユリウスよ。我を守り、勝利をお導き下さい……！」

クレアは首から下げた、代々受け継がれてきた 永久の盟約 に祈りを捧げる。

永久の盟約。ユリウスが 魔竜大戦 において、偉大なるものを召喚する為に用いたとされる魔法石。

伝承によれば 永久の盟約 はト阿德ユヒターの名の下に再び、偉大なるものを召喚する力があると言い伝えられている。

この石を受け継ぐことこそ、ト阿德ユヒターの誇り。名誉の全て。永久の盟約 を服の下に仕舞い、毅然と敵を睨む。

「行くぞ、ト阿德ユヒターの小娘！」

「下劣なる男……その罪を必ず贖わせる……！」

ヴィグルは懷から黒い、手帳ほどの契約書を取り出す。クレアもまた、白の契約書を取り出す。

「ヴィグル・バルガットが命じる！ 我が声を聞きし者よ、ここに来たれ……！」

「クレア・ト阿德ユヒターが命じる！ 我が呼び掛けに応えて、ここにいでよ……！」

トリガーワード によって、地面に魔方陣が光り輝く。それは互いに開いた頁と同じ物。

「サイクロプス……！」

「ウインドウルフ……！」

ヴィグルの巨大な魔方陣から、一つ目の巨人が出現する。凶暴に

して凶悪なるもの サイクロプス だ。

対するクレアは複数の魔方陣を生み出し、そこから灰白の狼を複数呼び出す。

「ハハッ、ウィンドウルフだと！？ そんな雑魚で俺のサイクロプスに勝てるつもりか？」

「っ……」

サイクロプスとウィンドウルフでは、その強さが根本から違う。そんな事は言われるまでもなく、クレアも知っている。

（戦力差は百も承知。だからこそ戦略と戦術……知恵と勇気でその差を補う。そうですよ、兄様！）

フレデリックの教えてくれた言葉を武器に、クレアの戦いが始まる。

ウィンドウルフは地を駆けて、サイクロプスの勇猛に襲いかかる。駆け抜ける一瞬で爪が振るわれ、サイクロプスの皮膚が斬り裂かれる。

「なっ……！」

その速度は力こそ高いが、鈍重なサイクロプスでは追いつけない。力で対抗できないのなら、別の部分で対抗すれば良い。

その点ではウィンドウルフは適役であった。

「バカが！ そんな攻撃じゃ、サイクロプスは倒せはしないぞ！！何をしている、さっさと吹きとばせ！！」

ヴィグルの命令にサイクロプスが動く。鈍重な動きで拳を握り、真っ直ぐに地面に叩きつける。

ゴバァァアアッ！！

その一撃で地が揺れ、砕かれた地面ごとウィンドウルフが跳ね上げられる。そこに返す刀とばかりに豪腕が振るわれる。

「っ……!!」

弾けるようにウィンドウルフが微塵と化す。血と肉片が飛び散り、周囲を染める。

「はっはあ！ 見たか、これが巨人使いの バルガットの力だ！ トアデユヒターの小娘に俺のサイクロプスを倒せるものかよ！」

「 来い、ウィンドウルフ！」

クレアは構わず、もう一度ウィンドウルフを召喚する。

「……チッ、サイクロプス!!」

ヴィグルの命令に、サイクロプスが動く。再び皮膚を斬り裂かれるも、全てが薙ぎ払われる。

「ウィンドウルフッ!!」

構わず、更にクレアはウィンドウルフを召喚。

「このガキ……俺をナメてんのか？」

そう言いつつ、ヴィグルは何か予感めいたものを感じていた。

ヴィグルは傲慢だが、無能ではない。余りにもあからさま過ぎる動き。これだけ同じ事を繰り返す意味は何か。それを考える。

（そろそろ……仕掛ける！）

「 ”行け”っ！」

クレアがウィンドウルフに指示を飛ばす。ヴィグルも反射的にサイクロプスに迎撃を指示する。

その瞬間、上空からヴィグル目掛けて魔法の矢が襲いかかった。
「ぐあっ!？」

ヴィグルの体を矢が貫き、バチバチとスパークが走る。

決闘の際、その生命を奪わないようにと、 守護の凱符 という
防御術が掛けられている。

これは、特定回数ダメージを最低レベルまで軽減するもので、
これが解けるか、術者が敗北を認めるか、もしくは意識を失った時
点で決着となる。

「チッ、いつの間にハーピーなんて召喚しやがった!？」

元よりサイクロプス相手に戦える召喚獣など、クレアには無い。
唯一の勝機は、ヴィグル自身を倒すことだけだ。

幸いにして、巨人系は強力だが複雑な命令では動かせないという
弱点がある。そこを突けば、勝ち目はある。

「やれ、ハーピーッ!」

クレアは上空にいる翼持つ魔物 ハーピー に、攻撃を命令する。
ハーピーが魔力で構成された矢を、ヴィグル目がけて斉射。サイ
クロプスはウインドウルフを相手にしているせいで動けない上、上
空のハーピーには攻撃できない。

このまま一気にとクレアが意気込む。が、ヴィグルはニヤリと笑
った。

「ハッ、この程度かよ？」

「っ!？」

いきなりヴィグルの両側の地面が隆起し、彼を守るように覆う。
そのまま膨れ上がるように持ち上がった地面が、新たな巨人の姿
を形取る。

「ロックゴーレム 岩の巨兵……!？」

ロックゴーレム。魔道士が生み出す使い魔と、魔力を宿した鉱物
がなるものと二種類存在する巨人。

ヴィグルが召喚したのは後者。天然物はレアであり、強力な存在

である。

「何驚いてやがる？ 巨人使いのバルガットがまさか、巨人一匹しか使えないとも思ってたのか？」

「っ……！」

巨人は強力だが、その使役が難しい。並の才能なら一体の召喚だけで手一杯になる筈。

だがしかし、二体ぐらいならば予想できたことだ。ゴーレムはヴィグルの守りを行うだろうから、此方の手数を増やせば良い。

「クレア・トアデュヒターが命じる！ 天空を舞う者よ、ここに来たれ！！ ハーピー！ ダイバーイーグル！！」

上空に魔方阵が複数輝き、数体のハーピーと巨大な鳥獣モンスターを召喚する。

「ククク、これだけの数を同時使役……なかなか頑張るじゃないか」「くっ……！」

クレアは額に滲む汗を拭う。一体一体の使役は難しくないが、これだけの数を同時にとなれば、集中力も精神力も消耗する。

体内の マナ も磨り減り、長期戦は不利。ここで一気に攻め切りたいところだ。

「折角だ。良いものを見せてやろう」

「何を……！？」

「ヴィグル・バルガットの名の下に！ いでよ、スティールゴーレム鋼鉄の巨兵！」
「ッ……！」

巨大な召喚魔方阵から出現する、三体目の巨人。ロックゴーレムの上位個体であるスティールゴーレム。鋼鉄で作られたその体は頑強にして堅牢。並の魔法では、傷一つ付けることさえ叶わない。

「さあて……覚悟は良いか、トアデュヒターの小娘？」

「黙れっ！」

まさか、巨人を三体同時に。しかもヴィグル自身が、これ程に強力なカードを持っているようとは。

だが、それでもやらねばならない。兄の為、家の為、自身の為に、

卑劣なる悪漢を打ち倒すのだ。

だが、現実は無情である。どれだけクレアに正義と理があろうとも、そんなものは現実を変える材料にはなり得ない。どれ程に悪劣であろうとも、圧倒的な力を振るう者が勝者であり、勝者こそが正義を作るのだ。

ヴィグルはスティールゴーレムに自分を守らせて、空を舞っていたハーピーやダイバーイーグルに対して取った策は、原始的な投石という攻撃。だが、巨人の投げる石は巨大で、まるで砲撃のように飛ぶ。

その速度は躲そうとしても躲しきれるものではなく、全てが落と

された。

地上を駆けるウィンドウルフも、サイクロプス一体ならまだしも、ゴーレムを含めて三体の攻撃に全滅させられる。

「クッ……！」

「いい加減降参したらどうだ？ 所詮、この俺には勝てやしないんだからなあ」

「黙れ！ トアデユヒターは賢者ユリウスの家柄！ その名に賭けて負けはしない……！」

「……はあ、何カビ臭い傲慢してんだよ？」

ヴィグルは心底馬鹿にしたように嘆息し、肩をすくめる。

「その賢者様がいたのは800年前の話。それこそお伽話の世界だぜ？ そもそも、本当にそんな賢者がいたのかさえ、怪しい話だ」

「貴様、我が祖先を侮辱する気か……！」

「侮辱ねえ……してるぜ？ 気に食わないなら、実力で訂正させてみるよ……！」

「がはっ……！」

サイクロプスの拳が、クレアを捉える。細身の体が弾き飛ばされ、壁に叩きつけられてから地面に崩れ落ちる。

守護の凱符 の力でダメージが抑えられるとはいえ、巨人の一撃は装備を固めた歴戦の戦士でさえ一撃で殺す程だ。クレアの体がその一撃に耐えられる訳もないが、しかしそれでもクレアは意識を繋ぎ止め続ける。

「ゴホッ……！」

全身に走る痛み。クラクラとする頭と、こみ上げる吐き気とが不快さを増すが、それでも必死に堪える。

今の彼女のカードには、巨人三体を倒すものはない。もう、これ以上の手立てはない。

「……………」

いや、まだ一つだけある。クレアは仕舞っていた 永久の盟約

を取り出す。

言い伝えによれば、この魔法石は 偉大なるもの を召喚する事が出来るとされてきた。だが、ユリウス以降、一度たりともそれを召喚した者はいない。

だがもしも、 偉大なるもの を召喚できたなら巨人三体程度相手にもならない筈。

偉大なるもの。 魔竜大戦 において地上に戦火を拡げた魔竜 ザガート を地の底に叩き落として、世界に光を取り戻したものの。

伝承に曰く、『相応しき者の呼びかけに応え、我は再び舞い戻らん』。

「お願い……私に力を……」

相応しき者。それはきっと、兄 フレデリックの事だ。妹である自分ではない。そんな事は分かっている。だけど、それでも力を貸して欲しい。悪に鉄槌を下す、その為に。

「ああん？ 何をしようってんだ？」

クレアは全ての マナ を魔力に変えて、 永久の盟約 に注ぐ。
「ユリウス・トアデユヒターの名の下、古の盟約に従いてクレア・トアデユヒターが呼ばん。この声を聞く者よ、我が呼び掛けを聞き届けるならば、応えたまえ……！」

「ハッ、カビ臭い伝説に縋るってか？ いいぜ、やってみせろよ！伝説の 偉大なるもの ってヤツを召喚してみろよ！！ 伝説ごと、粉々にしてやるぜえ……！」

嘲り笑う声が響く中で、クレアは必死に呼び掛ける。伝説を、誇りを、自分の全てを懸けて。

「この声を聞く者よ、どうか我が呼びかけを聞き届け、応えたまえ……！！！」

そして、それは起こった。

「くっ　　!?」

閃光が走り、アリーナを埋め尽くす。クレアを中心にして巨大なる召喚魔方阵が描かれ、それが幾層にも渡って天に延びていく。

ドオオオオオオンッ!!

そして、その魔方阵を撃ち抜くようにして、光が降臨する。地に落ちた瞬間、烈風が吹き荒れて周囲を砂塵が襲い、誰もが視界を塞がれた。

「冗談じゃねえ……!　何なんだよ、これはあっ!?!」

砂塵の中に現れたのは黒い、見た事もない異装に身を包んだ男性。年の頃は見た目同じ頃だろうか。

召喚に成功した　　少なくとも　永久の盟約　は発動した筈だ。なのに何故、こんな一見普通の少年が目の前に居るのか。

「くっ……こうなったら仕方ないわ」

もう、その身に マナ は残っておらず、今にも意識を失ってしまいうた。

それでもクレアはその身を無理やり起こし、目の前の巨人に驚き声を上げている少年に向かって指を突きつける。

永久の盟約 が彼を呼んだのなら、彼こそが 偉大なるものなのだ。少なくとも普通の人間である筈がない。

そんな荒唐無稽な考えに、クレアは全てを賭ける。

「クレア・トアデユヒターの名において命ずる。あれと戦い、殲滅しなさい！！」

「出来るかあつー！！」

賭けは、あっさりと敗北した。

選択肢無き戦場

サイクロプスが鈍重な動きで、その拳を振り上げていく。上げられたものは、当然下ろされる。その先に居るのは 勿論零司だ。

「うわああああっ!？」

悲鳴を上げて、零司はその場から走って逃げる。それを追い立てるようにサイクロプスが腕を振り下ろした。

ぶうううんっ!!

風圧と共に伝わる低音がうなじをくすぐった瞬間、零司の全身をとてつもない恐怖が襲った。肌という肌が泡立ち、筋肉が硬直する。バクンッ! と、心臓が高く強く打ち、しかし逆に全身からは熱が失われていく。

それら全てが脳に情報として伝わり、荒唐無稽な状況下にあつて、一つの結論を否応なく認識させる。

このままでは自分は死ぬ、と

零司も、一対一の喧嘩なら多少の自信がある。相手が複数でも三人ぐらいまでなら、一方的にやられたりはしないだろう。

だが、こんなのは無理だ。敵う訳がない。当たり前だ。フィクシヨン以外で、零司の世界にこんな怪物はいないのだから。

RPGなんかでは数値ばかりで考えもしなかった事だが、あの主人公達はどうかやってこんなのと戦ったり、逃げたりしたのだろう。可能ならば、そのノウハウを一から十まで聞きたいと、心から思った。

尤も、そんな事は不可能であり、可能であつたとしても、その為の時間も無いのだが。

零司はとにかく走った。ガクガクと震えて落ちそうになる足に、必死にムチを入れる。倒れればその後には待っているのは、壁の花か地面のシミか。

「ヒイヒイヒイツ!?!」

悲鳴と共にジャンプ。零司のいた場所にゴーレムの平手が叩きつけられる。地面がひび割れ、その風圧が零司の体を飛ばして、地面にゴロゴロと転がさせた。

「ッ……!」

視界に掛かった影にゾワツと鳥肌が立った。痛みを感じる間もなく、零司は立ち上がって走り出す。

サイクロプスがその巨足を持ち上げ、踏み潰さんとしていたのだ。間一髪でそれを躲し、バランスを崩しながらも足を動かす。風圧が零司を吹き飛ばして、またしても地面を転がされた。

「おいおい、何だよこりゃあ？」

ヴィグルは余りにも拍子抜けた。まさかの召喚成功かと思いきや、出てきたのは何処の馬の骨とも分らないガキ一人。もしかしたらなんて思いもあり、一応仕掛けてみたが、とんだ見当違いであった。すばしっこく逃げまわるが、それももうすぐ終わりだろう。なにせ、何度となく地面を転がされながらも走り続けて、心身ともにボロボロだ。ぜいぜいと肩で息をして、汗と砂にまみれた何とも情けない姿を晒している。

別段、人を殺めることに対して抵抗がある訳ではない。むしろ無能な愚民など、有能な選民の下敷きでさえあれば良いとさえ思っている。だが、路傍の石を蹴るのにも、己の足を動かさなければならず、それはとても面倒くさい事だった。

「つたく、さつさと終わらせろよな……」

ヴィグルはうんざりした表情で、特別観覧席を見上げた。

「むう……これは止めるべきかのお？」

コロシラムに設けられた王族用観覧席。そこからこの決闘を観覧するのはこの国　【ザンクトガルト王国】国王【アウグスト4世】である。

強力な巨人を三体も使役するヴィグル。対して人海戦術にて対抗しようとしたクレア。どちらも見事な技量を有しているが、しかし今の状況はどうだろう。

突如として、凄まじい光が発せられた後、そこにあるのは巨人に追い立てられる異装の少年。

乱入者ということは、　守護の凱符　を掛けられたはいないだろう。つまり、巨人の一撃を喰らえば、その瞬間に命を落とすということだ。

流石に若い命が目の前で散るのを見るのは忍びないと、王は試合を止めるべく、近衛に指示を出そうとした。

「　お待ちください、国王陛下」

それを止める声があつた。空間が歪んで『カッン』と、石畳が鳴る。警備兵がすぐさま王を守るべく動くが、王はその顔を見るなり、喜びと驚きの声を上げた。

「おお、レーヴェ殿！ 久しゅうあるな」

「陛下も、御壮健で何よりです」

レーヴェと呼ばれた男は、深々を頭を下げた。

「……じゃが、試合を止めるなとはどういう意味じゃ？ 既に勝負は決したと思うのだが？」

「それは見当違いです。まだ、トアデユヒターが召喚した者が残っているではありませんか」

「むう……しかし、あれは只の人であろう？」

「……見ていれば分かります。きっと、もうすぐです」

レーヴェのもったいぶった口調に、国王はモヤツとしたものを感じながら、試合を続行させた。

「何をしているの!? 逃げてばかりいないで戦いなさい!!」

クレアは、ステイルゴーレムからの執拗な攻撃を躲しながら叫ぶ。

「ふざけんなっ! 大体、さっきから偉そうに戦えだの何だの言いやがって!! 何様だ、テメエッ!!」

サイクロプスの攻撃を躲しながら、零司はクレアに怒鳴って言い返す。

「なっ……! 契約で召喚されたくせに、私に口答えっ!?!」

そんな零司の態度に、クレアは信じられないとばかりに声を荒らげた。契約を結び召喚されたものは、例外はあるものの召喚士の命令に従うものだ。従わないものは、召喚士の力量に沿わないか、絶対的な個の意志を持った存在であるからだ。

だが、どう見ても零司は”絶対的な個の意思”持っているようには見えないし、”自分の力量に沿わない”とも思えない。だというのに、命令に従わずに口答えまでする。そんな事実があり得るというのか。

「ッ! バカッ! さっさと逃げろっ!!」

零司がハッとして叫ぶ。クレアが反射的に振り返ると、そこにはステイルゴーレム。

「っ!? あぐっ!!」

その巨大な手が、クレアの細い身体を鷲掴みにして持ち上げた。

「はっはあっ! 鬼ごっこもここまでだぜ、トアデユヒターの小娘!!」

「ヴィガルウ……ッ!、」

悔しさにギリ、と歯ぎしりする。弱い自分が恨めしくて、悪辣で

卑劣な者に屈しようとしている自分が情けなくて、涙が出そうになる。

「ほおら、さつさと参ったしちまえよ？ 楽になれるぜ？」

ヴィガルはスティールゴーレムにギリギリと、しかし絶妙に守護の凱符の発動をさせないレベルで、クレアの身体を締め上げさせる。

「が……ああ……っ……！」

クレアの内側からは、メキメキという骨の軋む音が聞こえる。息を吐き出されるが、吸うことも出来ず、全身を走る耐えがたい苦痛

「いや……だ……！」

それでも負けを認めることなど出来ない。正義は自分にあるのだ。それに何より、苦痛から逃げて、自分に負けては、兄を傷つけたこの悪党と同じではないか。

「……ふん」

「ぐうう……ああ……っ……！」

ヴィガルはつまらなそうに鼻を鳴らして、ゴーレムに力を入れさせる。バチバチとクレアの体にスパークが走る。守護の凱符が発動したのだ。

「……テメエッ！」

「っ……？」

怒号と共に、ヴィガルの顔面に拳が突き刺さる。零司が走る勢いのままにヴィガルを殴りつけたのだ。その勢いを利用した一撃に、ヴィガルは堪らず吹っ飛んだ。

「……あれ？」

それに驚いたのは零司である。吹っ飛んだと言っても、ただ耐え切れずに倒れたのではない。思いつ切り地面を数度転がっていったのだ。

現実として、人間のパンチにそんな威力はない筈だ。尤も、その

”現実”という言葉そのものが、今や怪しいのではあるが。自分の手をまじまじと見て、何処がおかしくなっていないか、つい確認する。

「この……クソガキがあつ!! 殺せ、サイクロプス!!」

ヴィガルが怒りと殺意に満ちた瞳で命令を出すと、サイクロプスは唸り声を上げながら破壊の鉄槌を振り下ろす。やはり鈍重ではあるが、しかしその威力は先程とはケタ違いだ。

「うわあああああつ!!」

地面がまるで爆発したかのように噴き上がり、零司の体がまるで紙屑のように飛ばされた。宙に投げされた身体はバランスを失い、零司は何とか姿勢を直そうとするが、しかしそれよりも前に零司の体は地面に叩き付けられた。

「ごほつ……!」

受身も取れずに落ちてしまった為に、全身を痛烈な痛みが走り、肺が空気を全て吐き出してしまう。咳き込みながら、零司は弛緩する体を動かそうとした。

（まじい……逃げらんねえ……!）

逃げようとする意思とは裏腹に、体が動かない。

グワングワンと揺らぐ視界には、此方に向かって歩いて来るサイクロプスの姿。

歩を進めるまま、その巨大な足をグワァツと持ち上げている。どうやら零司を踏み潰すつもりのようなのだ。

だが、零司の体はまだ動かない。

（死ぬ……マジで? こんな訳の分からない場所に、訳の分からないまま来ちまって……それで……死ぬ!?)

事此処に至って、零司の心を恐怖よりも怒りが占めた。

自分は普通に生活していただけだ。なのに、いきなりどうしてこ

んな仕打ちをされなければならない。理不尽だ。余りにも理不尽過ぎる。

誰が何と言おうと、こんな事を認める訳には行かない。認められるものか。

「……けんな」

ギリ、と歯を噛み締める。砂が入ってるせいで、ジャリという音がする。

「……ざけんな」

全身至る所に付いた擦り傷に切り傷。ボロボロになってしまった学ラン。まだ明日も学校があるというのに、何を着ると言うのだ。許せない。許せるものか。

「ふざ……ける……なあああああああああつ!!」

怒りのままに零司が叫ぶ。しかし、巨人の足は零司を圧殺するべく容赦なく振り下ろされた。

ミツケタ

「っ……！？」

聞えたのは、まるで小さな子どもの声。その瞬間、コロシアムを突風が襲った。それはまるで、零司を守るようにして渦巻き、巨人の足を押し返してみせた。

「なっ……！？」

「何……？」

サイクロプスがバランスを崩して倒れるさまに、ヴィガルは驚き、クレアは突然の事態そのものに驚きの声を上げた。

「むう、この風はなんじゃ……！？ とても強い マナ を有しておるようじゃが……？」

「当然です。これは 風の精霊^{シルフ} の風ですから」

「風の精霊^{シルフ}じゃと……！？ まさか……何故、精霊が人里に……？」

「約束 だからです」

「約束……？」

「ええ。800年前に結ばれた盟友との約束……さあ、始まりますよ」

吹き荒れる風に、レーヴェは愉快そうに口元を歪めた。

疾風怒濤の逆転劇

零司の周りに渦巻く風。その中心で当の本人は呆然としていた。何せ、いきなり声が聞えたかと思っただけだ。そうやってしまうのも仕方ないだろう。

「一体何がどうなってんだよ……もう、ワケが分からねえ……」
肉体的にも精神的にも、いっぱいいっぱい零司は泣き出しそうな声で呟いて空を仰いだ。

クスクス

よわよわ

また聞こえる、小さな子どもの様な声。何処からするのかと視線を落とすと、蛍みたいな翠色の光がヒュルヒュルと、零司の周りを幾つも飛んでいた。

「な、何だ……これ？」

零司がポカンと口を開けていると、その光が零司の目の前に集まってきた。今度は何が起きるんだ、そう思うより早く、光が弾ける。

「クスクス」

「なさけないかお」

「ボロボロだ」

果たしてそこに現れたのは、背中から透明な羽根を生やした手乗り人形程の大きさの存在。それがボロボロの零司を見て、クスクスと笑っていた。

「よ、妖精……？」

「ようせいちがーう！」

「シルフはシルフッ!」

「かぜの マナ ヽッ!」

「は、はぁ……!?!」

零司の言葉が気に食わなかったのか、それらはプンスカと手足をばたつかせる。

「シルフ……って確か、風の精霊……だったか?」

「そう」

「シルフはシルフ」

「かぜの マナ ヽ」

「……」

非常に頭が痛い。余りにも要領を得ないせいで、理解が出来ない。取り敢えず分かった事は、『この名前がシルフ』という事と『シルフは 風の精霊 の名前である』という事と『何だか知らないが、シルフは かぜのまな らしい』ぐらいだろうか。

最後はともかく、前二つは理解できる。つまり、今の状況はこのシルフ が起こしている事なのだ。

しかし、そうすると何故 シルフ が自分を助けるような事をするのか、そこが分からなくなる。

「えっと…… シルフ ……」

「なに?」

「なにに?」

「うわっ、顔に貼り付くな!?! ……お前ら、何で俺を助けてくれたんだ?」

張り付いた シルフ をひっぺがして尋ねると、 シルフ は首を揃って傾げた。

「シルフ、 マナ・ルーラー とやくそくしたからだよ?」

「だよ?」

「は……? まな……るーらー?」

またしても新ワード登場である。

その マナ・ルーラー と約束していたから零司を助けた、とい

う事のようにだが、その マナ・ルーラー なる人物（？）が誰なのかが分からない。

少なくとも、零司の知り合いではない。だが、知り合いではない筈の相手が、自分を助ける理由は何であろうか。

「なあ、その マナ・ルーラー って何 ー」

「やくそく ー」

「シルフ のちから、かす ー」

「おい、話をき……つてえ!？」

シルフ がまた、翠色の光の玉になったかと思うと、それが次々に零司の中に飛び込んでいく。途端、全身に力が満ちていつて、その体を緑色の光が包みこんでいく。

「な……んだあ……!？」

？ マナ がない ー!？

？ からっぽ ー!？

？ しょうがないから、シルフ の マナ かす ー!？

「うわっ!？ 頭ん中に声がっ!？」

零司が思わず耳を押さえるも、声の中からする以上、全く意味のない行動だ。そして シルフ が零司の中に入ったせいか、今まで零司を守っていた風の壁が解けていく。

そしてその向こう側には、零司の命を奪わんとする一つ目の巨人サイクロプスが待ち構えていた。

「うわっ!？」

サイクロプスは今度こそはと、その巨腕を振り上げる。唸りを上げて繰り出される拳が零司に迫る。

躲せない。視界を覆う程の拳に、零司は咄嗟に腕を交差させてブロックする。だが、大地さえ砕く剛力を生身の、普通の人間が喰らって無事である筈がない。

「ぐあああああっ!？」

突き刺さる衝撃。零司の体がそのまま、大きく弾き飛ばされた。

そう、飛……ば……されただけだった。

空中に上げられた零司の体は、そのままクルリと回転して停止する。その全身を包み込むのは翠色の光。それはシルフの光と同じ輝きであった。

「つう〜っ！……って、あれ？俺……生きてる？」

ジンジンと痺れる腕を振って、零司はその事実に気付いた。それと同時に自分が今、普通に空中に浮いたままであることも。

「何なんだよ……もう……頭がおかしくなりそうだ……！」

「おかしくなるの……？」

「なるの……？」

「だあああああつ！頭の中で喋るなあつ！！これ全部、お前らがやってるのか……！」

「あつてるけどちがう？」

「これ、シルフのちからだけど、シルフのちからじゃない？」

「マナ・ルーラーのちから……！？」

「マナ・ルーラーの力……？」

やはり要領を得ないシルフの説明に零司は眉をひそめる。飛んでもうことも、サイクロプスの攻撃に耐えたこともシルフの力であるが、マナ・ルーラーの力でもあるというのはどういう事か。

「……つと……！」

しかし考える暇もなく、サイクロプスとロックゴーレムがその怪力を存分に奮って、投石攻撃を仕掛ける。ビュンビュンと飛んで来

るそれらを、零司は宇宙を滑るように躲していく。

「思った通りに動ける……？　これならっ！」

赤ん坊が誰に教わることも無く歩き方を知っているように。

鳥が空を飛べる事を、生まれながらに理解しているように。

零司の体はその力を自然と理解して、コントロールしていた。

「まずは……あの金属っぱいヤツだな！」

零司はクレアを捕らえている、ステイルゴーレムに狙いを定める。脳裏に生まれるイメージのまま、零司は風をその腕に纏わせた。？やっちゃえ！？

？ドカッンといっけえっ！？

「うおおおおおおっ！」

シルフの応援に後押しされて、零司は一気に地面すれすれまで急降下。そしてアイススケートのように猛スピードで地面を滑っていく。

零司に向かって、サイクロプスが豪腕をリアットのように振り抜く。

「うわっ……とお!!！」

ギリギリで体がかがめ、豪腕が前髪をかすめる。が、そのまま一気に駆け抜ける。

「ステイルゴーレム！　そいつをやれっ!!！」

ヴィグルはステイルゴーレムに、クレアに止めを刺すように命令を下す。

「デメーは寝てろっ！」

「ぐふあっ!？」

通り過ぎざまに石を弾き飛ばして、ヴィグルにぶち当てる。そして、命令のままクレアを握る手に力を込めるステイルゴーレムに向かって行く。

「っ……!!　ああ……っ!!！」

苦悶の声を上げるクレア。その声に零司の顔が苦々しいものに変

わった。

この訳の分からない状況の連続。クレアがその力ぎを握っているのは零司も感じていた。だからこそ、ここで彼女を殺される訳には行かないと、零司は右拳を握り固めた。それに合わせて、空気が圧縮されていくのを感じる。

「どるあああああつ！」

気合一発。圧縮した空気をぶつけるように、スティールゴーレムの腕に拳をぶつける。

グワアアアアアンツ！

まるで大鐘を突いたかのような音が響き、スティールゴーレムの腕が歪む。いや、歪んだだけではない。そこから亀裂が走っていき、ついに砕け散った。

零司は投げ出されたクレアを抱きとめると、一気にそこから離れる。その背中に、スティールゴーレムの倒れる音が届いた。

「おい、大丈夫か！？」

「っ……っ……っ！」

呻き声は上げるが、瞼が開かれない。

どうやら、命に別状はないようだ。しかし意識は少ばかり朦朧としているようだ。

その事にホツとしつつ、零司は壁に寄りかからせるようにして、クレアの体を下ろす。

「さて、後は……あれか」

零司は振り返ってそれを改めて見る。視界に映るのは巨人三体。しかし、さっきまでとは明らかに印象が変わっていた。あれ程に苛烈極まりない攻撃をしていた筈の巨人達。しかし今はその圧力を殆

ど感じない。

？いつきにやつちやえ〜！？

？やつちやえ〜！！？

「そうだな、今は……攻める時だな！！」

零司は自身に満ちる万能感のまま、その力を振るう。足元から噴き上がる風にその身を任せて、空高く舞い上がる。

「せりやあああああつ！！」

そのまま一気に急降下。サイクロプスの体目掛けて、風を纏わせたキックをお見舞いする。

零司はそのままぶっ飛ばすつもりであつたが、しかしその一撃は容易くサイクロプスを貫通。そのままグラリとサイクロプスが倒れた。

？まずはひとつ？

？ひとつ？

「ウリヤアアツ！！」

零司はそれに構わず、ロックゴーレムに向かう。風を纏ったキックを叩き込んだ。

グワツシャアアアアアツ！

渦巻く風が岩の体を削り落とし、粉微塵となって岩の巨人は石の山へと変わる。

「セイヤアアアアアツ！！」

そして最後の一体　ステイルゴーレムも蹴り飛ばす。が、金属製の体は頑強で、叩き込んだ胸部は凹んだものの、しかし倒せてはいない。

腕を砕いた時と違い、威力を集中させていないからだと判断した零司は、ステイルゴーレムの反撃を躲しつつ、手に力を集中させ

る。

「ズバツとやっちゃえ〜!?」

「ズバズバ〜ッ!?」

「ズバツと……なるほど、そういうのもあるか……!」

零司はイメージする。鋼鉄さえを両断する　疾風の刃を。それに従って、風がその姿を変えていく。より強く、より鋭く、より激しく、力が集束していく。

「ボロボロのスクラップにしてやる……っ!」

「?してやる〜!?」

「?してやる〜!?」

「わ〜い!?」

零司が再び上空に飛び上がる。そして、ステイルゴーレムの真上から、集束した力を一気に開放して撃ち放った。

「うおおおおおおおっ!」

解き放たれた風は、ステイルゴーレムを包みこむ。最初は小さな傷、そこから更に斬りつけて、全身をこれでもかという程の回数、斬裂し続けた。

そして止めとばかりに、零司は圧縮した空気を、その頭頂部目掛けて叩き込んだ。

響き渡る重厚な金属音。その圧力と衝撃に、ボロボロとなった体躯は耐え切れずに崩壊していく。

「そ、そんなバカな……!」

眼の前で起こった光景の前に、ヴィグルは信じられないといった表情であった。実際、この圧倒的過ぎる逆転劇を誰が予想できたであろう。

「これで……後はお前だけだな?」

ボキボキと指を鳴らして、零司は歩いてヴィグルに近付いて行く。未だ倒れたままのヴィグルは、這いずるように後へと下がるが、すぐに行き止まる。

ロックゴーレムの残骸。それに逃げ道を塞がれ、気が付けば零司は目の前に立っていた。

「さあて……色々、覚悟はいいよな？」

「ひいつ……！？」

今までの威勢は何処へ行ったのか。ヴィグルは滑稽な悲鳴を上げた。圧倒的優位に居た筈の自分が、今まさに追い詰められている。そんな状況になっては仕方ない事だ。

だが、だからといって零司に容赦してやるつもりなど毛頭ない。散々殺されそうになったのだ、今度はこいつに味わってもらわなければ気が済まない。

「ふんっ！」

「グフツ!？」

零司の足がボディに突き刺さると、そのまま蹴り上げる。そして浮いたヴィグルの顔面目掛けて、拳を叩きつけてやった。

「ブファッ!？」

ヴィグルの身体は二回、三回とバウンドしてそのまま地面を滑っていき、そしてコロシアムの壁に激突して止まった。風が舞った砂埃を吹き消せば、そこに残ったのは完全に意識を失ったヴィグルだけだった。

召喚者が意識を失ったことで、召喚されていた者達もその残骸を失っていく。

ここに、完全な決着が付いた。

ウァ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアッ!!

「っ！？　なんだあ！？」

巻き起こった歓声に、零司はビックリして耳を塞いだ。よくよく周りを見れば、何処も彼処も人、人、人である。今までもずっといた観客に、零司はようやく気が付いたのだった。

？　おわった〜！？

？　シルフ、やくそくもった〜っ！？

？　ばいばーい？

「え！？　ちよつと待て！？　まだ聞きたいことが！」

零司の体から　シルフ　が出てきて、零司が止める間もなく、そのまま風に溶けて消えていった。

「……………くそっ」

色々聞きたいこともあったのだが、消えてしまった今では如何にもならない。それにまだ、手掛かりは残っているのだから。

零司は視線を　シルフ　の消えた中空から、離れた場所の壁に向ける。そこにいるもう一つの手掛かり　　クレアを見た。

クレアが薄らぐ意識の中で見たのは、絶望的な状況があったという間に覆されていく光景だった。

巨人が崩れ落ち、憎き敵がまるでボロ屑のように転がっていき、そして響き渡る歓声が勝利を教えてくれた。

そして、クレアはその視線を徐々に上へと持ち上げた。

「よう、生きてるか？」

「あなたは……何者なの？」

「何者も何も……普通の高校生だよ」

「"コウコウセイ"……？　それがあなたの種族？　それとも……部族なの？」

「はあ？　なんだそりゃ？」

「……違うのか？　なら……一体……？」

クレアの言葉が絶え絶えになっていく。もう、意識を留めておくのも限界だった。そのままズルズルと、クレアの体が落ちていく。

「おい、ちよつと待て！？　聞きたいことがあるんだ！　起きろ、おいっ……！」

零司は咄嗟にその体を押さえ、揺さぶってみる。が、クレアは完全に意識を失っており、この場での覚醒は絶望的であった。

「おいおい、マジかよ……！」

周りは未だ熱狂する観衆ばかり。何も分からないままに、零司は独りでそこに残されてしまった。

これからどうすれば良いのか、どうなるのかさえも分からず途方にくれる零司に、声を掛ける者があった。

「相変わらず、君は元気だね？」

「……？」

掛けられた声に振り返れば、そこに立っていたのは一人の男だった。

年の頃は30代前半ぐらいで、明るいブロンドの髪と翡翠の如き瞳。服装は白地に金の刺繍の入った魔道衣^{ロブ}と、肩当て付きのマント。そして右手には、白銀の装飾が詠えられた魔道杖^{ウィザードスティック}。そして最も特徴的であろうところは　長く尖ったその耳。

零司の世界にも、そういう耳をした種族が登場する物語はよく在

った。

エルフ族。

森に住まい、森を守り、人との関わりを避けるという、人よりも不老にして長寿な種族。

「エルフ……？」

「800年ぶりだね、マナ・ルーラー？」

「……………は？」

今さらりと、とんでも無い事を言われた気がした。

「マナ・ルーラー……………？ 誰が？」

「君が」

「俺が？」

「君が」

「……………ハアツ！？」

つい、大きな声が出てしまった。だがそれも仕方ないことだ。自分を マナ・ルーラー と呼んだのだから。

マナ・ルーラー。シルフ と約束をした存在で、シルフと同じような力があるらしい。と、それぐらいしか分からないが、それでも自分がそんなのではない事だけは確信を持って言える。

「ちよつと待った！ 俺は マナ・ルーラー とか、そんなんじゃない！！」

「……………ふむ、どうやら本当に力と記憶を無くしているようだね？」
「無くしてない！ 普通に知らないし、力なんて元から無いっての！！」

「大丈夫、心配は要らない。忘れてしまった事をちゃんと教えるよ

……そういう約束だからね。取り敢えず、彼女を運んでくれるかな？ 何時までも此処にいる訳にも行かないだろう？」
「してねえよ！！ 話聞けよ！！ 何奴も此奴も！！！」

零司の叫びは、未だ興奮覚めやらぬ観衆の声に掻き消されるのだ。
った。

異世界の夜が更ける

馬車が石畳の上を走る。サスペンションなど無い車輪はガタガタと揺れ、あぜ道を走る車の方が遙かにマシであると零司は思った。

あの後、クレアは簡単な手当をされてから、レーヴェの手配した馬車に乗せられ、零司も共に行くよう言われた。零司自身、この突然過ぎる事態の中心であろうクレアから離れる気はなかったし、なにより行く宛もない。選択肢はなかった。

窓から見える街並みは、歴史の教科書や映画なんかで見たような昔のヨーロッパに似て、しかし看板などに書かれている文字は英語でもドイツ語でも、フランス語でもない。近いものを上げるとすれば、ハンゲルであろうか。しかしどうという訳か、言葉は問題なく通じるらしい。

零司は視線を外から馬車の中へと移す。向かい側の席にはその体を横たえ、未だ眠ったままのクレアがいた。

（今更だけど……俺、本当に別の世界に来ちまったんだな……）

命の危険がなくなり、やっと冷静になれて、ようやく実感する。ここは、自分の知る物の何一つない世界。そして誰も、自分を知らない世界なのだと。

ガラガラと、車輪が回り続ける。石を弾いたのだろう、大きくガタンツ、と馬車が揺れると、零司はバランスを崩して倒れかけた。

座っている座席も綿が入っているのだろうか、どうにも硬く、まるで板切れに座っているような感じた。さっきから尻が痛い。

そんな零司を余所に馬車は進んでいく。街を抜けて郊外に入ると、揺れはますます酷くなった。

「おいっ！ 一体何がどうなってるんだ！？ マナ・ルーラー
てのは何だ！？ どうして俺をそんな名前で呼ぶ！？ そもそも、
お前は誰で、ここは何処なんだ！？」

クレアを救護室へと運んだ後、零司は謎のエルフに詰め寄っていた。

「やれやれ、いきなり質問責めかい？ 少しは落ち付くと良い。時間
は有限だが、それでも余裕が無い訳ではないのだからね」

「あんたはそうだろうけど、こっちは余裕なんて無いんだよっ！
！」

鼻息荒く声を荒げる零司に、レーヴェは肩をすくめて、やれやれ
と首を振った。

「まず、私の名前はレーヴェ。今から800年前、ユリウスや君と
共に 魔竜大戦 を戦った者だ。種族は ハイ・エルフ で、マ
スター・エルフ の一人だ」

「…………… ちょっと待った。色々聞きたい事が更に増えたというか、
ツッコミどころが増えたというか…………… まず、そのユリウスって言
うのは誰だ？」

零司がレーヴェに尋ねると、彼は呆れたといった表情で深々と溜
息を吐いた。

「君は…………… 本当に全てを忘れているのか……………？ まさか、ユリウス

の事も、完全に忘れてしまったというのか？」

「忘れたも何も……そもそも、初めて聞いた名前だつての」

どうあつても自分を記憶喪失にしたいらしいレーヴェに、うんざりしたように返す零司。

そもそも、マナ・ルーラー が800年前の人物なら、自分と同一である筈がない。人間の寿命など精々100年前後が限界だ。もし仮に800年生きたとしても、生まれて16年の零司では掠りもしない。

「この世界は【パラスティア】。創世の女神【ウル・ティアーラ】によつて創られたと言われている。今から800年前、遙か南の凍れる大地にある魔界へと繋がる大穴より一匹の魔竜が現れた。その名を ザガート という」

「……………」

語るレーヴェの瞳は真つ直ぐに零司を見据える。知らず知らず、零司は唾を飲み込んでいた。

「ザガートは強大な魔の マナ を有し、魔族の軍勢を従えて地上へと侵攻してきた。パラスティアに住まう者達はその力を結集しザガートと戦った。だが、魔族はどうか出来てもザガートは余りにも強く、精霊の王たる 四元精霊 ですら、何とかザガートを抑えるので精一杯だった……………」

レーヴェは一息吐き、言葉を区切る。

「一進一退の攻防の末、徐々に疲弊した我々は魔族に押し込まれ始めた。そこでユリウス・トアデューヒターはザガートに対抗しうる存在の召喚を試みた。七日七晩の時を超えて、ついに大召喚術は成功。ユリウスは マナ・ルーラー ……すなわち、君を呼び出したのだ」
「なるほど……………」
「つて、ちょっと待てつて！ だから俺は マナ・ルーラー ってのじゃなくて、普通のごくごく一般的な高校生なんだよっ！！」

「これだけ説明してもまだ思い出さないのか……。最早、思い出すのは絶望的か？」

「だから記憶喪失とかじゃなくて、本当に知らないんだっての!!」
レーヴェは深々と嘆息し、零司は全く噛み合わない会話に声を荒げた。

「話を続けよう。ユリウスが マナ・ルーラー を召喚し、状況は一変した。 マナ・ルーラー は四元精霊の力さえも自分の物とし、激しい戦いの末、ついに マナ・ルーラー はザガートを大穴へと叩き落とした。首魁を失った魔族は一樣に撤退し、パラスティアの大地は守り通されたのだ」

「……つまり マナ・ルーラー ってのは、世界を救った存在って事か？」

零司はポツリと呟いた。

「その通り。 マナ・ルーラー とは……世界を救った『伝説の召喚獣』の名なのだ」

「なるほど、伝説の召喚獣ね。伝説の………召喚獣？」

「召喚獣だ」

何かの間違いかと零司が聞き返すと、レーヴェはやはりハッキリと言った。

マナ・ルーラー は召喚獣である、と。

「ちょっと待て!？ マナ・ルーラー って召喚獣なのか!？
なんで俺が召喚獣扱いされなきゃならないんだよ!？」

「何でも何も、召喚士によって召喚され、契約の下にその力を振るう存在 それが召喚獣だからだ」

「百歩譲って マナ・ルーラー が召喚獣ってのは良いよ。でも、それがイコール俺になるのはおかしいだろ!？ 俺は一般人! ごく普通の高校生なんだぞ!？」

「ふむ、コウコウセイというのが種族か……いや、部族名か？」
「……そのボケも、もう良いって」

ガクリと肩を落とす零司。このままでは話が進まないと、一先ず

マナ・ルーラー の件は脇に退かす事にした。

「とりあえず、この世界の事や マナ・ルーラー が何なのかは分かった……事にしとく。で、一番肝心な事だけど……俺は元の世界に帰れるのか？」

若干緊張しつつ、零司はレーヴェに尋ねた。妹・真希の持っているライトノベルなんかでは、異世界に召喚された人間は元の世界に帰れなかったり、帰るために多大な苦勞をする羽目になったりする。後者ならば希望があるので良いが、前者であつたならば余りにも酷い。

「帰れるとも」

そんな零司の緊張も葛藤も無視して、レーヴェはあっさりと答えた。

「帰れるのか……？」

「召喚魔法は呼び出す事と呼んだ者を還す事、その二つで成り立っている。事実、ユリウスは 魔竜大戦 の後、 マナ・ルーラー の送還を行なつた」

「そ、そうか……なら、今すぐに俺を帰してくれ！」

元の世界に帰れる。零司はレーヴェにすぐるように叫んだ。だがしかし、現実はそのままで甘くなかつた。

「残念だが、それは私には出来ないことだ。送還とは呼び出した召喚士 クレア・トアデュヒターにしか出来ない事なのだ」

「そ、そうなのか……？」

「だから、彼女が目覚めますまで……送還は諦めてもらうしかないね」

日はすっかりと沈み、夜の帳が下りる頃、零司達は郊外の屋敷へと到着した。

それなりの大きさながら、傷みの多い古めかしい屋敷こそ、トアデューヒターの屋敷である。

「どうぞ」

「あ、どうも……」

この家の召使いだろう女性が、ティーカップをテーブルに置く。ついつい零司も頭を下げてしまう。召使いの女性は一礼すると、そのまま部屋を出て行った。

屋敷に馬車が到着すると、クレアは屋敷の奥　彼女の自室へと運び込まれた。

砂埃に汚れた服を払われてから零司が通されたのは、応接間である。広い部屋だった。テーブルには燭台。壁には大型の暖炉。柱にはカンテラのような照明器具。天井には、少しばかり薄汚れたシャンドリアがそれらの明かりを反射して輝いている。

文明社会で生まれ育った零司にとって、電気が一切無く、薄暗いこの部屋だけでカルチャーショックだらけであった。

零司は自分の中の不安を誤魔化すように、出されたお茶に口を付けた。

「あ……美味しい」

口に入った瞬間、鼻腔を抜ける香りに、思わず感嘆の息が漏れる。喉も乾いていたせいか、ふーふーと冷ましながら、お茶を啜り続ける。

そうしてティーカップが空になった頃、応接間の重厚なドアが開

いた。

「お待たせして申し訳ありません。私が当屋敷の主、アルフレアです」

姿を現したのは、深い色のブロンドの髪をまとめてシニヨンキャップに納めた女性。服は暗色系のワンピースらしき服だが、余り上等な素材ではないように零司には見えた。だが、着ている人間の気品というのだろうか、そういった雰囲気は身につける装束をドレスか何かに見せてしまう。

「この度は娘を助けて頂き、ありがとうございました」
アルフレアはそう言って、深々と頭を下げた。

「いや、俺はそんな……それより娘さんの容態は？」

「幸い、大きな怪我もしていませんが…… マナ を完全に使い切ってしまったていて…… 明日までは眠ったままでしょう」

「そうですか…… 困ったな」

零司はおもむろに携帯電話を取り出す。あれだけの大暴れにも拘らずに無くさなかった事もそうだが、壊れてもいないという奇跡ぶり。流石は安全と信頼のメイドインジャパンである。

携帯電話のディスプレイには『21:03』の数字。当然、電波が入る筈もない。

「……………」

アルフレアは零司の携帯電話を不思議そうに見ていたが、あまりジロジロ見るのは失礼と、視線を外した。

「そういえば、お名前をまだ伺っておりませんでしたわ。宜しければお教え頂きますか？」

「あ、諏訪零司です」

向かいに座ったアルフレアに名を尋ねられ、零司は普通に答えた。
「スワ・レイジー様、ですか。変わったお名前ですね」

「……いや、零司が名前で、諏訪が苗字…… ファミリーネームです。つまりレイジ・スワです」

「まあ、そうでしたか。ファミリーネームが先だなんて、珍しいで

すわね」

「そうですね……ははは……」

零司にしてみれば、この世界そのものが遥かに珍しい。というより、あり得ないだらけだ。

「ところで、レイジさん。もう夜も遅いですし、今日は屋敷にて一夜をお明かしてください」

「えっ！？ いや、でも……」

その気遣いは嬉しい。なにせこの世界に行く宛など無いのだ。当然、泊まる所など無い。

だが、零司にしてみればこの世界で一夜を明かすよりも、さつさと元の世界に帰してくれた方が何百倍も有り難かった。

だが、それは叶わない願いだ。元の世界に帰れる可能性を持っているであろうクレアは、明日まで眠り続けるという。どうあがこうとも、零司はここから出ることは出来ない。

「遠慮しないで下さい。ボロで無駄に大きいから、部屋だけは余っているのですから」

そんな零司の内心に気付かず、遠慮していると思ったのだろう。

アルフレアはコロコロと笑った。

「……じゃあ、お世話になります」

零司はうなだれるようにして、頭を下げたのだった。

「はあ……」

部屋へ通された零司は、深々と溜息を吐いた。ボロボロの学ランを脱ぐと脇の椅子に投げて、そのまま体をベッドへと横たえる。ギシギシと音が鳴った。

「………つつかれたあ」

ベッドは固めで、まるで煎餅布団のようだった。だが、色々あり過ぎた事で疲弊し切った身体は、零司の意識を眠りの底へと誘い、
瞼が我が意志を持ったように下がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8923t/>

伝説の召喚獣！

2011年7月13日18時13分発行